

連携展示

阿波の道を歩く

芭蕉をめざした男

現代アーティスト

酒井弥蔵 × 大久保英治 展

とき:2016年7月20日(水)~8月28日(日) ところ:文化の森総合公園
入場無料

会場:徳島県立近代美術館、文書館、博物館、二十一世紀館、鳥居記念博物館ロビー
図書館1Fギャラリーは7月5日(火)~8月21日(日)

休館日 月曜日(ただし8月15日は開館)

主催 「徳島県の文化の創造的再発見事業」実行委員会

共催 文化の森6館(図書館、博物館、鳥居龍蔵記念博物館、近代美術館、文書館、二十一世紀館)、
つるぎ町教育委員会、鳴門市教育委員会、海陽町教育委員会

県内巡回

2016年 10月1日(土)~10月30日(日)織本屋(つるぎ町)

11月5日(土)~12月1日(木)鳴門市立図書館

12月10日(土)~2017年1月22日(日)海陽町立博物館

ごあいさつ

徳島は、江戸時代の全国レベルの五街道の整備エリアからははずれていましたが、そのことがかえって阿波五街道*や遍路道など、地域に根ざした街道の拡がりにつながりました。

江戸時代末期の徳島・半田(現つるぎ町)の人、酒井弥蔵(1808~1892年)は、松尾芭蕉にあこがれて各地を旅し、多くの旅日記を残しています。そして今、歩くことを作品制作の重要な要素としている現代アーティスト・大久保英治(1944年~)が、そんな酒井弥蔵の足跡や阿波の道に注目し、これを歩いて作品を制作しています。

本展では、酒井弥蔵とその旅の足跡、旅日記等の資料、さらには阿波の街道、遍路道などに関する歴史・民俗資料と、弥蔵の足跡や阿波の街道、松尾芭蕉の「笈の小文」などをテーマとして制作された大久保英治の美術作品をあわせてご紹介します。

これは、文化の森の徳島県立近代美術館、文書館、博物館が中心となって連携し、歴史と美術がクロスする重層的な視点から光を当てる新たな取り組みです。まず文化の森で、それぞれの館のロビーを活用した分散型の連携展示を行い、その後は、弥蔵ゆかりの地、つるぎ町をはじめ県内3カ所の文化施設に巡回します。松尾芭蕉を接点に、江戸時代の酒井弥蔵と現代の大久保英治がここにつながります。阿波の道と人の持つ魅力を多面的に再発見する機会となれば幸いです。

*淡路街道・讃岐街道・播磨街道・伊予街道・土佐街道

2016年7月

「徳島県の文化の創造的再発見事業」実行委員会



酒井弥蔵のコーナー

さかい やぞう

文書館ロビー(2F)

酒井弥蔵の旅日記などの資料と、弥蔵の徳島での足跡をテーマにした大久保英治の作品を展示。「歩く」現代アーティスト・大久保英治が、江戸時代に松尾芭蕉にあらがれて旅をした徳島の酒井弥蔵のことを知り、弥蔵の足跡を歩き始めたのがきっかけとなった。

酒井弥蔵の生涯

酒井(塚屋)弥蔵は江戸時代後期の文化5年(1808)に武助・お芳夫妻の長男として、美馬郡半田村(現つぎ町)に生を受けている。筆まめであった彼は膨大な記録を遺しているが、そこからは故郷である半田に軸足を据えた実直な生活者としての側面と、心豊かな趣味人としての側面を持った彼の生涯が浮かび上がってくる。

彼が遺した大福帳などによると、自分の農地で藍や煙草・芋などを栽培すると共に、吉野川中流域における物流の拠点である半田小野浜の川湊での荷の上げ下ろしと輸送、配送業や委託販売などを生業としていた。高齢になってからは、趣味である占いの謝金が生計を助けていたようである。

日々の生業に真面目に取り組むと同時に、彼は俳諧を嗜み、石門心学(石田梅岩が創始

した庶民のための道徳)を学び、浄瑠璃や相撲見物を楽しむなど、地元では趣味人・教養人として少しは知られた存在であった。

また、彼は生涯に170回を越える旅に出たと自ら記している。多くは近郷への小旅行であるが、文政13年(天保元年・1830)の伊勢神宮への御蔭参りや嘉永2年(1849)の出雲大社参詣のような大旅行も含まれており、慶応4年(明治元年・1868)にはおりからの「ええじゃないか」にも参加している。これらの旅のいくつかでは「見る青葉聞く郭公旅日記」「出向ふ雲の花の旅」といった、尊敬する芭蕉を意識したであろう旅日記を遺している。これらの旅日記に自作の俳諧とともに旅行経費を事細かに記録するあたりが、生活者としての彼の面目躍如たるところであろう。

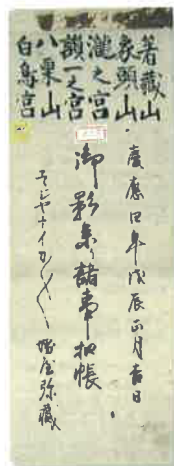
明治25年(1892)、弥蔵は江戸から明治にかけての激動期を一市井人として生きた、八十有余年の生涯を終えている。(TT)



酒井弥蔵72歳の肖像写真
明治12年(1879)撮影 徳島県立文書館蔵



「座本蛭子家忠太夫」
明治12年(1879) 徳島県立文書館蔵
弥蔵は自分が観た浄瑠璃興行に関する絵入りの記録を多数遺している。(TT)



「御影参り諸事控帳」
慶応4年(1868) 徳島県立文書館蔵
弥蔵による「ええじゃないか」の参加記。



「年々種蒔植物覚帳」
嘉永5年(1853) 徳島県立文書館蔵
弥蔵は毎年植え付けた作物を記録している。

最初の大旅行 文政13年御蔭参りの旅

文政13年(1830)閏3月初旬に阿波国ではじまるとされる御蔭参りは瞬間に全国に広がり、この一年間だけで400万人を越える人々が伊勢に向かっていく。その群集の中に酒井弥蔵がいた。

弥蔵が遺した「天照皇太神宮豊受皇太神宮御影参」などによると、彼が「私宅ヲ拔出」したのは御蔭参りが本格化するより少し前の3月27日の夜。彼の記録には御蔭参りにはつき

ものの「御札降り」などの奇瑞に関する記述は見受けられず、知人から餞別を贈られるなど「抜参」とはいいながら、かなり公然と旅立っている。

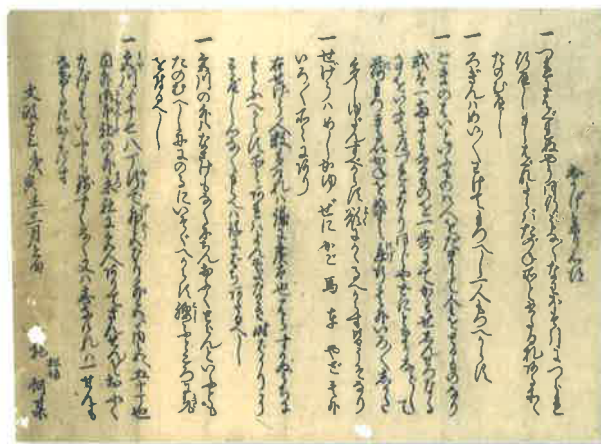
乗船した船が大風のために阿波に引き返すといったハプニングはあったものの、翌閏3月1日には無事紀州に上陸。その後、各地で施行を受けながら紀三井寺、粉河寺や高野山を回り、奈良では大仏殿や興福寺・春日大社などを参詣。8日に目的地である伊勢の内宮・外宮の他に二見神社などを参詣。その後、大津の三井寺や石山寺、京都では御所や本能

寺・百万遍・知恩院・清水寺・方広寺・三十三間堂・東西本願寺・東寺、伏見稲荷、大坂の天満天神や四天王寺・阿弥陀池などの神社仏閣や名所旧跡をめぐりつつ、20日に故郷に帰り着いている。彼は御蔭参りのついでに、畿内一円の神社仏閣などめぐり一大観光旅行を行ったわけであり、帰着後には親戚から「お慶び」も貰っている。

弥蔵は生涯で170回を越える旅に出たと記しているが、この御蔭参りの旅はその最初の大旅行であったといえる。(TT)

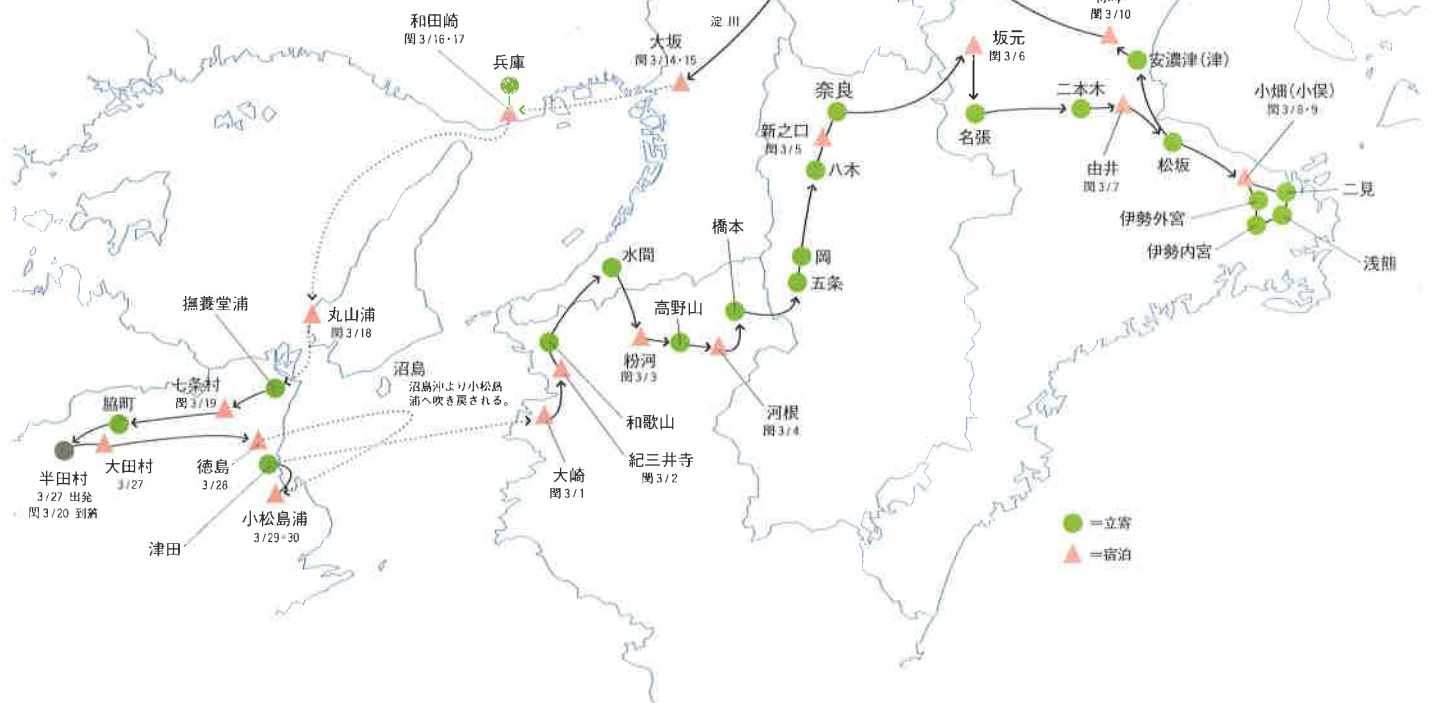


「天照皇太神宮豊受皇太神宮御影参」
文政13年(1830) 徳島県立文書館蔵



「おかげ参り心得」
文政13年(1830) 徳島県立文書館蔵
伊勢の松坂付近で配られていた御蔭参りの参加者のための「マニュアル」。施行や賽銭に関する情報や、ゴマの糞などに対する注意喚起などが書かれている。(TT)

文政13年(1830) 酒井弥蔵の御蔭参り行程図



大久保英治 (1944年～)
おおくぼ えいじ

現代アーティスト。1970年代にミニマルアート^[1]から出発し、ランドアーティスト^[2]として世界的に活躍。歩くことを特徴とする作品も多く、松尾芭蕉^[3]をはじめ、空海や木喰上人^[4]、西行^[5]などの足跡を歩いて作品を制作。徳島県立近代美術館には、お遍路や吉野川をテーマに、大久保英治の歩行と旅が生み出した作品が収蔵されている。〈剣山から石槌〉(1998年)、〈空へ〉(1998年)、〈影シリーズ〉(1998年)、〈吉野川一場の刻 6/30・9/29・12/1〉(2012年)など。

1944年兵庫県西宮市に生まれ、幼い頃に岡山県矢掛町に移り、高校までをここで過ごす。現在は大阪府在住。1967年日本体育大学を卒業し大阪府の体育の教員を経て1973年に大阪で初個展を開催。美術は独学。以後、国内外で多数の個展・グループ展に出

品。徳島県立近代美術館の特別展では、四国八十八カ所を歩くプロジェクト「大久保英治 四国の天と地の間ー阿波の国から歩く」展(1999年)、「自然を見つめる作家たちー現代日本の自然表現と伝統ー」展(2002年)、「本と美術ー20世紀の挿絵本からアーティスト・ブックスまで」展(2002年)、「きんぴアート発見学ーつくる&みることとの交流展ー」(2013年)等に出品。

近年ではやかげ郷土美術館(2014年)、相生森林美術館(2014年)、シアン美術館:韓国、慶尚北道(2014年)、全北道立美術館:韓国、全羅北道(2015年)等で個展、グループ展。アーツスペースChoA:韓国、慶尚南道(2015年)では大がかりな屋外作品〈三望庭〉を設置。またこの秋(2016年)には、韓国、大邱広域市中区Bongsan文化センターでの個展も予定されている。(TS)

[1]ミニマルアート:色や形、塗り方などの造形要素をシンプルで最小限なものに切り詰める表現の傾向。1960年代にアメリカを中心に生まれた。抽象表現の究極の姿の一つであるとともに、その作品が置かれる場所や空間との関係性が重視される。

[2]ランドアート:1960年代に起こった自然を素材や場所として作品を制作する表現の傾向。アース・ワーク、アース・アートとも呼ばれ、概念的な傾向も見られる。

[3]松尾芭蕉(1644~1694年):「古池や 蛙飛びこむ 水の音」などで有名な江戸時代前期の俳諧師。日本各地を旅したことも知られる。(『野ざらし紀行』『笈の小文』『奥の細道』など)

[4]木喰上人(1718~1810年):五穀や肉を断ち木の実などを食べる修業「木食戒」をへて、50歳代後半から日本各地を旅し、60歳頃から仏像(木喰仏)を作り始めた。その数1,000体とも2,000体ともいう。

[5]西行(1118~1190年):「願はくは花の下にて春死なん そのきさらぎの望月のころ」などで知られる平安末期から鎌倉初期の歌人。文武両道に秀でた武士であったが、22歳で出家し諸国を遍歴、多くの和歌を残した。芭蕉も西行に影響を受けている。



徳島と愛媛の県境「境目峠」にて(2016.5.4)

大久保英治の歩いた道(歩行ルート)

- 「芭蕉を目指した男」2015.3.29-2015.12.19 124km
土佐泊、鳴門、吉野川北岸(撫養街道)を西へ美馬、吉野川南岸へ渡り半田の弥蔵旧宅、南岸(伊予街道)を東に徳島、津田まで。第十堰から吉野川河口まで。鷺の門から立道(淡路街道)まで
- 「南帰行」2016.1.23-2016.3.6 140km
香川県境の大坂峠から(讃岐街道)南へ、鷺の門から(土佐街道)南へ高知県境の穴喰、水床まで
- 「西方行」2016.3.20-2016.5.4 96km
鷺の門から吉野川南岸(伊予街道)を西へ愛媛県境の境目峠まで。



「芭蕉を目指した男」ルート

- ◎土佐泊 2015.3.29
- ◎半田(酒井弥蔵旧宅) 2015.8.18/2015.12.19
- ◎鷺の門 2015.11.13

「南帰行(なんきょう)」ルート

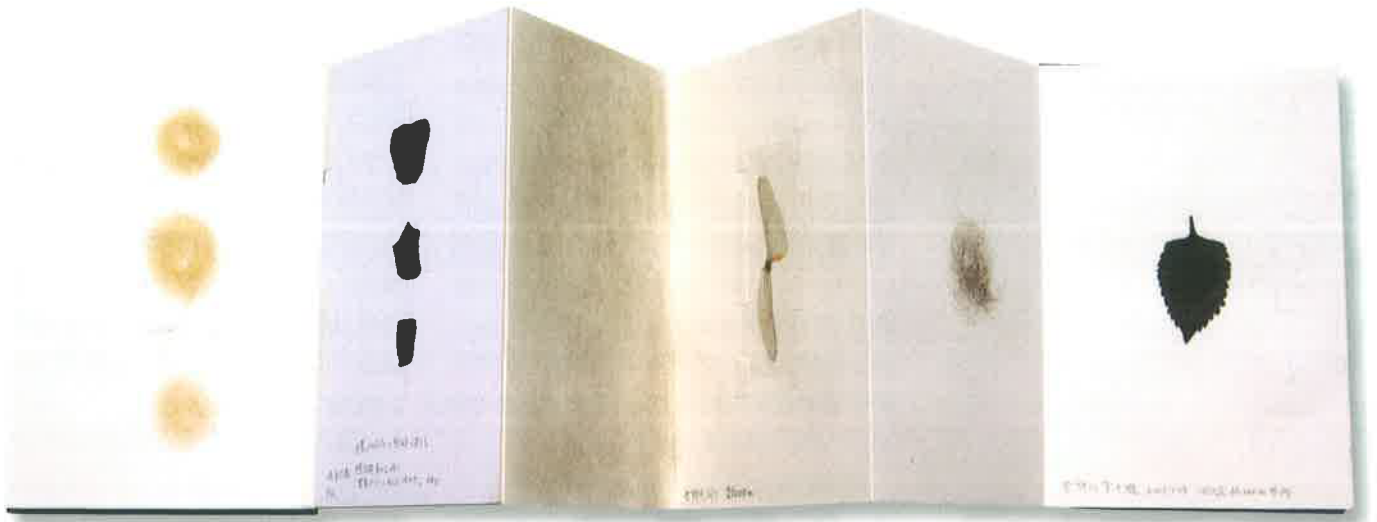
- ◎大坂峠 2016.1.23
- ◎鷺の門 2016.2.06
- ◎水床トンネル 2016.3.6

「西方行(さいほうこう)」ルート

- ◎鷺の門 2016.3.20
- ◎境目峠 2016.5.4
- ◎半田 2016.4.5
- ◎境目峠 2016.5.4

※大久保のルートは、必ずしも江戸時代の街道と一致するものではない。

大久保英治〈芭蕉を目指した男1 撫養～半田～徳島～大道 撫養街道、伊予街道、淡路街道 歩行124km〉2015年 作家蔵



折り本の土文(つちふみ)

土、石、羽根、葉、写真ほか 紙 22.0×15.0×2.5cm

作品解説

酒井弥蔵(1808～1892年)の多くの旅の中で、大久保が特に注目したのは、文政13年(1830)の御蔭参り(伊勢参り)である。この旅で弥蔵は、半田を出発して伊予街道を東に進み、津田、小松島から和歌山へ渡る。そこから高野山、奈良を経て、伊勢に向かう。帰途は京都、大坂、神戸から鳴門に渡り、撫養街道を西に半田へと戻っている。このルートの畿内の部分は松尾芭蕉が『笈の小文』で歩いたルートと重なる部分も多い。大久保はこれを弥蔵の芭蕉へのあこがれの表れと受け取り、強く共感した。なぜなら大久保自身も2009年春にこの芭蕉の『笈の小文』のルートを歩いているからである。ここに、芭蕉を接点にして弥蔵と大久保が出会うこととなった。

この作品は、弥蔵のルートのうち徳島の部分を大久保が歩いて制作したものである。歩くルートは一筆書きではなく、お遍路で言うところの区切り打ちのように歩いた。歩行距離は124km。春、夏、秋から初冬にかけての旅。

すり減った木片、木片の断面をスタンプした阿波和紙、そして折り本で構成されている。ヒモをつけた角材の木片を引きずって歩きながら、要所要所で折り本にその場所の土をその現場でこすりつける。あるいは拾得物をコラージュしていく。新品の角材のすり減り具合は、その断面のスタンプで視覚化されている。(TS)



スタンピング

墨 阿波和紙 22.0×22.0cm



朴(ホオ)の木片

4.0×6.0×30.0cm【原型6.0×6.0×30.0cm】

笈おいのこぶみ小文のコーナー 近代美術館ロビー(2F)

酒井弥蔵と大久保英治を結びつけたのは松尾芭蕉の『笈の小文』。これをテーマにした大久保英治の作品と弥蔵が所有していた『笈の小文』と関連資料を展示。

芭蕉をめざした男 弥蔵と俳諧

酒井弥蔵が本格的に俳諧に取り組むようになったのは文政9年(1826)、19歳の頃からだと考えられている。彼が暮らした半田は俳諧がさかんで、祖父の孫助(春里庵農人)や父の武助(春陽亭梅月)も俳諧に熱心に取り組んでおり、このような環境の中で弥蔵も自然と俳諧を嗜むようになったと思われる。彼が属していたのは当時の阿波国で主流であった美濃派(松尾芭蕉の弟子各務支考にはじまる一派)の俳諧グループで、春耕園農圃(甫)などの俳号を持つ彼は自らを「芭蕉翁九世」の弟子とする強い道統認識も有していた。

松尾芭蕉の百五十年遠忌にあたる天保14年(1843)、芭蕉を敬慕する人々の手によって、彼の「雲雀より うへに休らふ 峠かな」

の句を刻んだ句碑(雲雀塚)が半田の小野峠に建立された。この雲雀塚は同年3月下旬に完成し、4月12日に半田内外から多くの人々が集って句会が開催されている。このときの句を集めた句集が『雲雀集』であるが、そこには弥蔵が五畿内を行脚した時に大和国(現奈良県)臍(細)峠でこの句を写し取っており、これが建立のきっかけとなった旨が書かれおり、続いて彼の「供養せん 実にや峠の 雲雀塚」という句が載せられている。なお、この「雲雀塚」は嘉永7年(安政元年・1854)の南海地震によって倒壊し、翌年に弥蔵らの手によって修復されている。

弥蔵の生きた時代は俳諧の大衆化が進んだ時期であり、庶民芸芸としての俳諧の裾野を支えていたのは弥蔵とその仲間たちのような存在であったといえる。(TT)



『笈の小文』

宝永6年(1709) 徳島県立文書館蔵
「雲雀より 空に休らふ 峠かな」の句を載せた芭蕉の俳諧紀行文。
弥蔵は天保12年(1841)にこれを買って求めている。
なお、『笈の小文』以外の多くでは
「雲雀より うへ(上)に休らふ～」となっている。(TT)



現在の雲雀塚



「出向ふ雲の花の旅」(表紙)

嘉永2年(1849) 徳島県立文書館蔵
弥蔵が仲間と共に出雲大社を参詣した時の旅日記。
途中、備後国(現広島県)鞆の浦や美作国(現岡山県)
鳥居峠では芭蕉塚(句碑)に立ち寄っている。(TT)



「出向ふ雲の花の旅」より 鳥居峠の部分

鳥居峠の芭蕉塚には
「雲雀よりうへに休らふ 峠かな」
の句が刻まれている。(TT)



『蕉風俳士見立鏡』

嘉永5年(1852)
徳島県立文書館蔵
半田・貞光・郡里・重清など
における俳人の番付。
弥蔵(農圃)は関脇となっている。(TT)



「雲雀集」

天保14年(1843)
徳島県立文書館蔵



大久保英治、旅と芭蕉と先人たち

大久保英治にとって、「歩くこと」、「旅」は作品制作のベースとなっている。その「旅」の追求のなかで、大久保は空海に引きつけられ、それは「四国の天と地の間—阿波の国から歩くプロジェクト」(1998年3月~12月実施。1999年、徳島県立近代美術館で展覧会開催)に結実した。それは遍路道で四国を一周

し、その後四国の東西南北を縦横に旅をするプロジェクトであった。この空海への探求の過程で、大久保はしだいに西行に関心を抱くようになる。そして、やがてそこから西行にあこがれた芭蕉へ、さらに時代を下って与謝蕪村や木喰上人へとその関心は継続していく。

平安初期の空海、平安から鎌倉の西行、江戸前半の芭蕉、そして江戸後半の木喰上人や蕪村。空海や西行に代表される遍歴、放浪

の旅にあこがれる人物が、時代ごとに登場し、旅し、歩くことが、連続と引き継がれてきている事実。その興味深いつながりのなかに自分自身もいると自覚していた大久保が、時代的には木喰上人や蕪村をちょうど引き継ぐ世代にあたる幕末の酒井弥蔵を、この徳島で知ることになった。歴史を貫いて人を引きつける「旅」と「歩行」の磁力が芭蕉を接点にして大久保と弥蔵を引き合わせたのかも知れない。(TS)

大久保英治〈笈の小文—大久保英治・大和路百里歩行—〉2009~16年 作家蔵

作品解説

松尾芭蕉『笈の小文』(宝永6年(1709)刊)は、貞享4年(1687)、芭蕉45歳の時に江戸深川から伊勢、伊賀上野を経て、奈良、吉野、須磨、明石へと旅をしたときの紀行文。西行や吉野桜へのあこがれが、芭蕉のこの旅の動機の一つだったともいわれる。

2009年春、大久保はこの『笈の小文』の旅のうち、芭蕉の生まれ故郷、三重の伊賀上野から明石までのルートを、芭蕉と同じ季節、同じ旅程で歩いた。歩行距離は約400km(百里)。

その歩行の途中での拾得物を仕切りのある標本箱のようなケースに収めたもの〈笈の物文(ものふみ)〉、道中でその場所の土を折り本の蛇腹のページに順番にこすりつけたもの〈笈の土文(つちふみ)〉、その都度の感慨を文章にしたためた紀行文〈笈の終文(ついふみ)〉、歩行の地図、写真などを、古いスーツケースに収めて一式にしたものがこの作品である。「笈」は現代でいえばリュックサックや旅行鞆にあたる。

また、今回の展示に際して新たなヴァージョンの土文〈笈の土文、円〉が追加された。素材の土は、2009年の歩行の際に採集していた現地の土を用いたが、一部は現地に赴き新たに採集した。2009年の土文は折り本のページ全面に土が塗られていたが、2016年版は1枚ごとに分かれたシート(42枚)の中央付近に土を円形にこすりつけている。それは禅の円相も思わせる。



スーツケースの内容

作品名	制作年	技法・材質	寸法(cm)
笈の物文	2009年	小石、鉄片、プラスチック片等	
笈の土文I・II・III	2009年	朱印帳、土	18.2×12.2×1.8
歩行記録写真ロール	2009年	カラーダイレクトプリント	3.5×82.0
会議録1・2	2009年	紙	18.0×24.1
鹿の角	2009年	山道で採取した鹿の角	47.0×11.5×10.0
さるのこしかけ	2009年	山道で採取した猿の腰掛	7.0×6.0×3.0
この道やI・II	2009年	パネルに写真、地図コピー	35.5×53.0×2.5
この道やIII・IV	2009年	パネルに写真、地図コピー	27.0×22.5×2.5
歩行地図	2009年	布に地図コピーをコラージュ	70.0×85.0
細峠(写真)	2009年	インクジェットプリント	102.0×72.0
笈の夜記(やき)一、二、三、四	2009年	和本に墨、インク他	24.2×12.2×0.8
笈の終文	2009年	朱印帳にペン書き	18.2×12.2×1.8
笈の土文、円(えん)	2016年	阿波和紙、土(全42点)	28.0×24.0

さて、この作品を美術史に置いてみれば、形式的にはマルセル・デュシャンが自分の過去の作品のミニチュアの複製を旅行鞆に一式のセットとしてまとめた作品〈ヴァリーズ〉(1936～1941年)を思わせる。しかし、デュシャンのそれが複製品による複数制作、すなわち「マルチプル」であるのに対して、大久保の〈笈の小文〉は、歩行した場所の磁場を強烈に宿したローカルな土着性を持つ「1点もの」である点で、両者は対極にある。いずれも普遍性へと向かう方向性をもっているのだが、デュシャンの方法が個別性を排した「マルチプル」という中立的な匿名性によって作品の存在論やオリジナリティについて問いかけるのに対して、大久保の場合は、その時その場所にしかないものが深く刻まれたきわめてローカルな土着性の中にある普遍性へと向かっている。様々にまわりつく物事を削ぎ落して行くデュシャンに対して、きわめて個別的なローカル性の中に普遍を見ようとする大久保英治。そのアプローチの方向の違いは興味深い。

「雲雀より うへに休らふ 峠かな」。この句は芭蕉が『笈の小文』の旅の途中、奈良の多武峰(どうのみね)より吉野へと越える細峠(ほそとうげ)で読んだといわれる。

「細峠一前略一芭蕉の句、ひばり。今回、そのひばりの声を聞く。それは峠(細峠)で、昼食中であった。突然、鳥の声。ひばりは畑があり、

平地での鳥というが、たしかに[ひばり]」(大久保英治〈笈の終文〉より)。

大久保は、この峠で雲雀の声を聞いた。雲雀はそもそも里で暮らす鳥。山の峠にいるとは考えにくい。果たして大久保の耳に聞こえた雲雀の声は実際の鳴き声だったのか、それとも、ふもとの里で聞いた鳴き声を知らず知らず想起していたのか。あるいは芭蕉の場合はどうだったのか。ここでは、その真偽を確かめることは問題ではない。重要なのは、この世の中にたった一つしかないこの細峠で、300年の時を隔てて芭蕉と大久保は同じ場所に座り、そこで雲雀の鳴き声を「聞いた」という事実である。きわめて個別的な体験を図らずも共有した二人はそこで、おそらく峠と山のふもと、高低、上下という関係性を思い、天と地に思いをはせながら「垂直性」という普遍へとアプローチしている。個人的でローカルな体験の中にある普遍とは、おそらくこのようなことではあるまいか。

弥蔵もまた、実際にこの細峠を歩き(1840～41年頃か)、この句を思い、出身地半田の小野峠にこの句の句碑を立てている(1843年)。弥蔵は芭蕉の雲雀の垂直性という普遍性に、自分の出身地というローカル性をさらに追加した。ちなみに、雲雀という鳥は繁殖期には垂直に飛び上がって行く習性を持つそうである。(TS)



細峠(写真)



笈の物文



〈笈の土文、円〉より 敦盛塚



山崎・国境



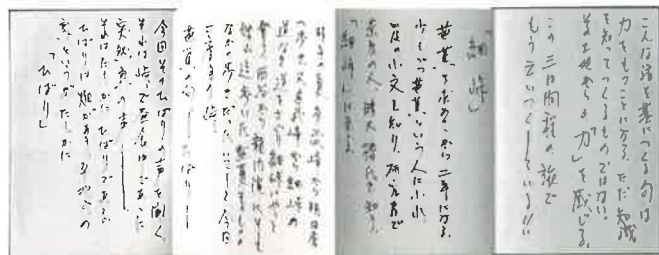
西行庵



細峠



笈の土文



笈の終文より「細峠」

博物館、21世紀館、鳥居龍蔵記念博物館ロビー(2F)

阿波の街道、遍路道のコーナー

阿波の街道や遍路道をテーマにした歴史・民俗資料と、阿波の街道をテーマにした大久保英治の作品を展示。

阿波の街道と遍路道

阿波の道は、古くから様々な物資を運ぶとともに、人々の交流を結びつける役割を果たしてきた。古代には、官道の一つである南海道が設けられ、江戸時代には、徳島藩蜂須賀家の城が置かれた城下町徳島を中心に、領内の町や村をつなぐ道が整備された。さらに、阿波国内だけではなく、淡路国や讃岐国、伊予国、土佐国の隣国に至る交通路として重視された。

とくに、徳島城を起点とした淡路街道(徳島城鷲の門から撫養岡崎に至る、4里の道)・讃岐街道(徳島城鷲の門から讃岐国境に至る、5里の道)・伊予街道(徳島城鷲の門から伊予国境に至る、20里2町余の道)・土佐街道(徳島城鷲の門を起点に土佐国境に至る、23里の道)、そして、吉野川の北岸を東西に通る撫養街道(撫養を起点に伊予国境に至る、21里30町余の道、河北本道とも呼ばれた)の五つの街道は、阿波の主要な道として江戸時代

前期に整備され、阿波五街道とも呼ばれた。阿波五街道には一里松が設けられ、およそ1里(約3.9km)ごとに松が植えられた。五街道に準ずる道として、脇街道なども整備されていた。

さらに阿波には、四国霊場八十八ヶ所を結ぶ遍路道がある。第一番札所霊山寺を起点に、第八十八番札所大窪寺に至る、全長1400kmに及ぶ道である。遍路は、古くは僧侶や聖(ひじり)たちの修行の場であったが、江戸時代になると一般庶民も巡拝を行うようになり、四国の内外から多くの旅人が訪れるようになった。阿波は「発心の道場」と言われ、遍路の出発の地であった。

このように、阿波の道は、古代の南海道や江戸時代の阿波五街道・遍路道など、古(いにしえ)より幾重にも積み重ねられてきた「歴史の道」と言える。そのことは、道の脇に建てられた道標や丁石などの石造物が、静かに物語っている。(MT)



笥

享保13年(1728) 徳島県立博物館蔵
盛作右衛門が六十六部廻国(全国を巡って法華経を奉納する巡礼)を行った際、仏像、仏具、衣類などを収納し背負ったものである。盛家は、18世紀に栄えた阿波の藍商人である。現在、笥の内部には経典、札、護符、文書などが収納されているが、所用者は複数にわたっており、一族の巡礼資料を一括して残してきたとみられる。巡礼の途中で採集したと思われる伊勢二見浦の藻などもあり、巡礼者の興味の在処がうかがえ興味深い。(HK)



丁石

江戸時代 徳島県立博物館蔵
四国霊場12番札所焼山寺から13番札所大日寺に向かう遍路道沿いにあった(神山町内)。焼山寺から115丁(1丁は約109m)地点であることを示す。(HK)



道標(複製)

原品 文化7年(1810) 徳島県立博物館蔵
原品は、四国霊場2番札所極楽寺境内にある。徳島講中を世話人、阿波の人と推測される照蓮を願主として建立されたもの。正面には、指印、弘法大師坐像が刻まれ、「四国中千体大師」とある。道標を1,000基建立する目標があったと思われる。(HK)

大久保英治と 木片、歩行、阿波の街道

1980年代、ミニマルアートから次第に自然を相手にするランドアートへと向かった大久保英治は、80年代末から「歩くこと」を重視していく。日本海岸や対馬を歩いて、海の向こうの大陸と日本との関係性をさぐり、空海や西行、芭蕉など先人の足跡を歩きながらその文化や生き方、風土への思いを深めていった。

主なプロジェクトとしては、「国境の間の国／対馬プロジェクト」(1994年)、「四国の天と地の間—阿波の国から歩くプロジェクト」(1998年)、「木喰上人の道」※(鳥取:2005、07年、岡山:2015~16年)などが挙げられる。また、日本列島を北海道から鳥取を経て韓国へ旅をし、そしてさらに西を目指したユーラシア・アートプロジェクト(1999~2004年)は、日本海を庭園の池に見立てる大きなスケール感を持って、大陸との文化、歴史のつながりを探った。かつて、大久保の代名詞だったこのような壮大な歩行はこしばらく行われていないが、大久保が歩くのをやめたわけではなく、近年は「歩くこと」の質の

変化が訪れている。

2014年、大久保は現在住んでいる大阪から出身地の岡山・矢掛町まで13日間かけて歩いた(13日間の歩行 大阪~矢掛)。これは、歩行の日ごとに制作したコラージュを一冊の本に仕立てた「一日一作品」と、写真と雑感を綴った記録集、そして須磨の敦盛塚※※での拾得物のコラージュによる組作品となった。敦盛塚はかつて「笈の小文」のプロジェクトでも訪れた場所。この時の歩行は、大久保の個人的な経験や記憶が密接に関わる私的ルートであり、それらのコラージュにも親密さが漂う。それは大久保が日常的に日課としている散歩の延長上にある。

今回、大久保が阿波の街道を歩きはじめたきっかけは弥蔵だが、弥蔵の足跡を歩くうちに、廻路道を歩いた経験も手伝って、やがて阿波の街道に関心を持つようになる。廻路道は撫養街道や讃岐街道、伊予街道の一部、そして土佐街道のかなり多くの部分と重なる。月に数回、1日10数キロから20キロ程度の徳島での歩行の継続は、阿波の街道の歩行を大久保の日常的な行為に近づけていった。先人の足跡

をたどるわけではなく、名所旧跡を巡るわけでもなく、時には名所も素通りし、徳島を支えてきた生活の道をただ歩く。

以前のような現地での自然物を使った作品制作もなくなった。ヒモをしばり付けた木片を引きずり、ただ歩く。さりげなく何かを拾い、時々立ち止まって紙に土をこすり付ける。

なぜ、木片を引きずるのだろうか。そのヒントは木喰上人にある。かつて諸国を巡って木喰が作った仏像は、時に地元の子供たちが、ヒモをつけて引きずり、おもちゃにしていたらしい。それを木喰上人は、ただ微笑み眺めていた、という。おもちゃにされてつるつるにすり減った仏像。そもそも仏像は本来どうあるべきなのだろう。

大久保が引きずってすり減った、ただの木片。大久保はそこに何を見ているのか。そして私たちはそこに何を見るのか。寡黙なこの木片は問いかけている。(TS)

※2015~16年に岡山でおこなった「木喰上人の道」のワークショップ(岡山県立美術館)でも大久保は木片を引きずって歩いている。
※※平家物語に登場する平敦盛の供養塔。

大久保英治〈南帰行(なんきこう) 大坂峠~徳島~穴喰 土佐街道 歩行140km〉 2016年 作家蔵

作品解説

大久保が引きずりながら歩いたヒモ付きの木片、その断面をスタンプした阿波和紙、歩行途中にその場所の土をこすりつけ、拾ったものをコラージュした折り本で構成されている。

歩いたルートは香川県との県境、大坂峠を出発点に、讃岐街道を南下して、撫養街道と交差する群頭を過ぎ、板野、藍住、吉野川を名田橋で、鮎喰川を不動橋でわたり蔵本を経由して伊予街道に入り鷲の門に至る。その後は土佐街道に入り、二軒屋を過ぎて恩山寺、立江寺を経由、そのまま南下し、羽ノ浦から新野、福井、由岐、木岐、山座峠を越えて日和佐、海部、穴喰、

水床トンネルを抜けて高知県境まで。歩行距離は140km。

大坂峠から瀬戸内海方面のすばらしい眺望、新野から動土原、福井から由岐峠と山を歩いてきてその後に開ける太平洋、牟岐から海部にかけての八坂八浜(やさかやはま)の絶景。山、町、海と変化に富む南下の旅。時期は冬から早春の頃。

折り本のコラージュ素材は小石や鉄くず、葉っぱ、鳥の羽など比較的变化に富んでいる。(TS)



スタンプング
墨 阿波和紙 37.0×22.0cm



桜(サクラ)の木片
3.0×3.5×15.0cm
[原型4.5×4.5×15.0cm]



折り本の土文
土、石、羽根、葉、金属片、写真ほか 紙 25.0×15.0×5.5cm

大久保英治 〈西方行(さいほうこう) 徳島～半田～境目 撫養街道、伊予街道 歩行96km) 2016年 作家蔵

作品解説

大久保が引きずり歩いたヒモ付きの木片、その断面のスタンプ、歩行途中の痕跡を残した折り本、という構成は変わらない。ただ、この〈西方行〉は2ヶの木片と2冊の折り本を用いて同時に同じルートを歩き、2パターン制作された。桜の木片と大きい折り本、桂の木片と小さい折り本がそれぞれ組となる。

歩いたルートは、鷲の門を出発点にして、一路、吉野川に沿って伊予街道をひたすら西に向かう。石井、牛島、山瀬、岩津、穴吹を過ぎて、貞光、半田。さらに加茂の大クス、辻、阿波池田。吉野川を西に横切って、馬路、佐野、そし

て愛媛県境の境目峠まで。歩行距離は96km。

主に一里松の跡をたどりながらの歩行。アップダウンが少なく、まっすぐ延びたルートのため、やや変化には乏しいが、川島から山瀬までの、あるいは三加茂辺りや辻の旧道など、ところどころ昔の街道の趣を残している。池田より西は高低差の変化もあり、最後の境目峠に向けてのカーブが続く旧道は趣深い。時期は早春から若葉の頃。

折り本は、土文と、拾得物や写真のカラージュによるもので、〈南帰行〉と共通するが、桜

の木片と組になる大きい方は、円相を思わせる土文が繰り返されるパターンを基調にして、虫眼鏡で焦がされた点や、羽、金属片、小石などのコラージュが淡々と展開する。また桂の木片と組になる小さい方は、これもまた禅のかたちを思わせる円、三角、四角のかたちが交互に登場するパターンを基調に土文とカラージュが展開する。いずれも〈南帰行〉や〈芭蕉をめざした男〉のそれに比べるとスティックな印象である。(TS)



折り本の土文(桜との組)

土、羽根、葉、金属片、写真、光ほか 紙 25.0×15.0×5.5cm

桜(サクラ)の木片

3.0×3.0×15.0cm
【原型4.5×4.5×15.0cm】



桂(カツラ)の木片

4.5×4.0×15.0cm
【原形5.5×5.5×15.0cm】



スタンプ(桜)

墨 阿波和紙 37.0×22.0cm



スタンプ(桂)

墨 阿波和紙 37.0×22.0cm



折り本の土文(桂との組)

土、羽根、葉、金属片、写真、光ほか 紙 15.0×9.0×4.5cm

大久保英治 〈水平と垂直 1〉 〈水平と垂直 2〉 2016年 作家蔵

作品解説

徳島県の地図にドローイングしたもの。大久保英治が今回歩いたルートを軸に、吉野川をはさむ撫養街道と伊予街道の東西方向と、大坂峠から水床トンネルまでの讃岐街道から土佐街

道をつなぐ南北方向が、それぞれ水平と垂直を成している。〈水平と垂直1〉(表紙、裏表紙)は2万5千分の1の地図をつないで床置きし、そこに文化の森の前を東西方向に流れる園瀬川の石によるケルン※を設置。〈水平と垂直2〉

(14ページ)では、徳島県全図の地図を用いている。(TS)

※ケルンはプレワークショップ「美術家・大久保英治と「石」をたてる:水平と垂直、境界、祈り」(2016年7月18日)で設置。ケルンとは、人の手によって石を積み上げたもの。山道の道標や境界、記念碑などのほか、宗教的な意味を持つ場合もある。

徳島の道のコーナー

第2会場 図書館1階ギャラリー

阿波の道をめぐる江戸時代の旅事情や、徳島の道を歩く現代アーティスト大久保英治の活動をとおり、阿波の道を歩く旅をご紹介します。

阿波の道を歩く旅

江戸時代における庶民の旅は、歩き旅であった。四国霊場を結ぶ遍路道を歩く旅のほか、伊勢神宮への御蔭参りは、多くの人々の心を魅了し、時には行く先々で名所へ立ち寄り、旅を楽しむこともあった。阿波においては、阿波の五街道が整備され、他国から阿波への玄関口であった鳴門海峡は、名勝案内の『阿波名所図会』に登場し、浮世絵にも多く取り上げられている。(TK)



阿波国絵図

明和7年(1770)森文庫(レプリカ)118.5×105.2cm 徳島県立図書館蔵
江戸時代中期の阿波国の絵図。薄く見える紫色の線は、御巡見使御巡路。巡見使は、江戸幕府の臨時職名の一つで、諸国監察のために派遣された。黄色の線は、道筋だが、牛馬不通という文字も見え、通行に困難な山道も少なからず見られる。(TK)

資料名	作者名	出版社	出版年
阿波国絵図(レプリカ)			明和7年(1770)
阿波の交通 上	「阿波の交通」編集委員会／編	徳島市立図書館	平成2年(1990)
四国遍路道指南増補大成 四国遍路道志るべ	眞念		天保7年(1836)
遍路道	徳島県教育委員会／編	徳島県教育委員会	平成13年(2001)
阿波遍路道	第12回全国歴史の道会議徳島県大会実行委員会事務局		平成26年(2014)
京城勝覧	貝原篤信		
江戸名所図会 全	十返舎一九		文化10年(1813)
阿波名所図会	探古室墨海	河内屋太助	文化11年(1814)
淡路国名所図会 巻之四	晁鐘成	藻文堂	明治27年(1894)
南海奇勝 山水奇観 第三編	淵上旭江	淵上旭江	
諸国定宿帳	[松屋甚四郎]	京都書林	文久2年(1862)
北斎漫画 七編 全	葛飾北斎	東壁堂	明治11年(1878)
諸国名所 北斎と広重6	檜崎宗重	講談社	昭和46年(1971)
浮世絵図鑑 別冊太陽(日本のこころ214)		平凡社	平成26年(2014)
御蔭参宮文政神異記	箕曲在六		天保3年(1832)
旅行用心集	八隅蘆庵		文化7年(1810)
旅行用心集	八隅蘆庵	八坂書房	平成5年(1993)
大久保英治 四国と天地の阿波の国から歩く		徳島県立近代美術館	平成11年(1999)
大久保英治 あることからはじまる		鳥取県立博物館	平成23年(2011)
芭蕉一新しめは俳諧の光		柿衛文庫	平成21年(2009)



『阿波名所図会』探古室墨海／著

文化11年(1814)森文庫 25.6×18.2cm 徳島県立図書館蔵
江戸時代後期、各地の名所図会が盛んに刊行されるなか誕生した阿波の名勝案内。著者の探古室墨海(浪華の人)が四国行脚の折に個人的に書き留めたものを刊行したと記されている。上下二冊からなり、鳴門、里海士、藍玉、桜間池、眉山、千代松原、太龍寺、母川鯉などの名所が、絵を中心に、和歌や神社仏閣にまつわる由来などを添えて紹介されている。(NM)

大久保英治〈徳島の道〉2014-15年 作家蔵



コラージュ・オブジェ(10点)

古本、染料、青石 15.0×10.5cm

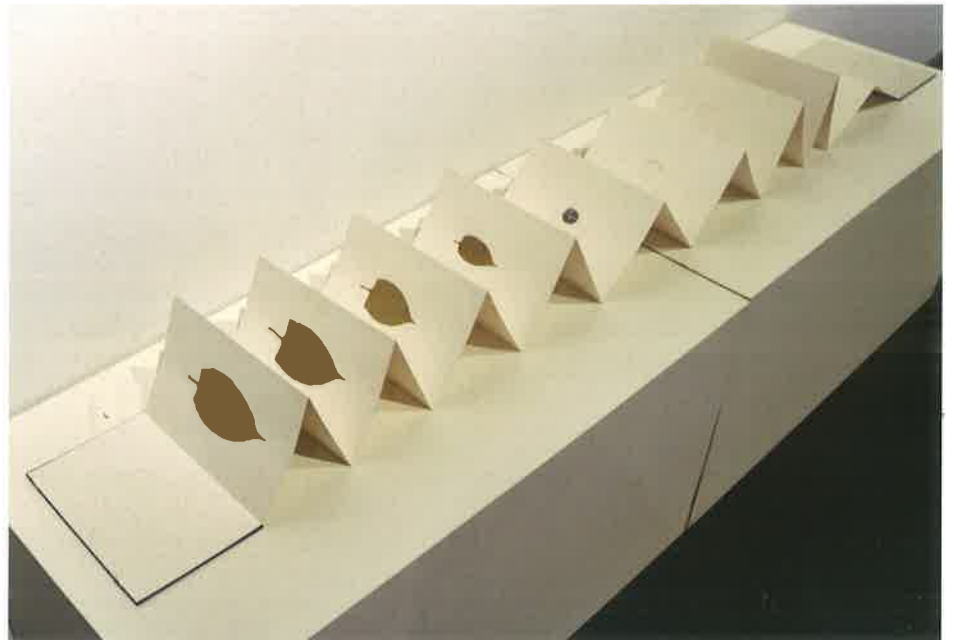
作品解説

徳島の遍路道のうち、焼山寺から神山を過ぎて大日寺までの鮎喰川沿いルートでの拾得物による5点のコラージュと折り本によって構成されている。

ピアノ線が縦に張り巡らされた白いフレームに収められた5点のコラージュはそれぞれ、世界は、地(ち)・水(すい)・火(か)・風(ふう)・空(くう)の五つの要素で出来ているとする、インドや密教由来の五輪(五大)の思想を基に、中国の五行思想の木(もく)・火(か)・土(ど)・金(きん)・水(すい)の要素をミックスした考え方で制作されている。地は土、水は河原の石と葉っぱ、火は線香の煤、そして風は丸い穴、空には金色に彩色した骨が用いられている。

折り本には鮎喰川で採集した葉っぱのコラージュとその輪郭が交互にあらわれる。行き来し、蓄積する徳島の時間を折り本形式が伝え、葉っぱとそこのかたちのトレースの繰り返しは、ものの形、存在を成り立たせているのは何か、という問いに誘う。

また、今回の展示に際して、10点のコラージュ・オブジェが新たに追加された。文庫本の古本を染料で固め、板ようになった古本に大神子海岸で採集した青石のかげらを貼り付けたものである。封印された古本は長い時間を、そして青石は地層が海を隔てて本州・和歌山とつながっており、お遍路も道もまた海の向こうの高野山まで通じていることを暗示している。(TS)



折り本

葉 紙 22.3×15.2cm



コラージュ(5点)

自然の拾得物:葉、小石等、ピアノ線 紙 15.0×10.5cm

時代をこえた男

それは三年前になるかと思います。

私は、かつて1998年に徳島県立近代美術館の「大久保英治 四国の天と地の間 阿波の国から歩く」プロジェクトで四国遍路を歩きました。それからおよそ15年。今度は家族や仲間たちとの気ままな気分での遍路旅と決めて、一番札所から再び歩きはじめました。そんな中、さだかではないけれども焼山寺からの下り道だったかで、友井さん(徳島県立近代美術館)から「大久保さんのような人が徳島にいるよ」との話。

その人は江戸時代後期から明治まで生きた半田町(現:徳島県美馬郡つるぎ町半田)の出身。なんと「芭蕉を目指した男」らしい。名前は

酒井弥蔵。本業は商業、農業をそして易学、俳諧をはじめ当時の世の流行りものまであらゆることに興味を示した人なのだそう。そして高いで旅を世の検分と俳諧の為に使ったとのこと。私はこの人に興味を抱きました。

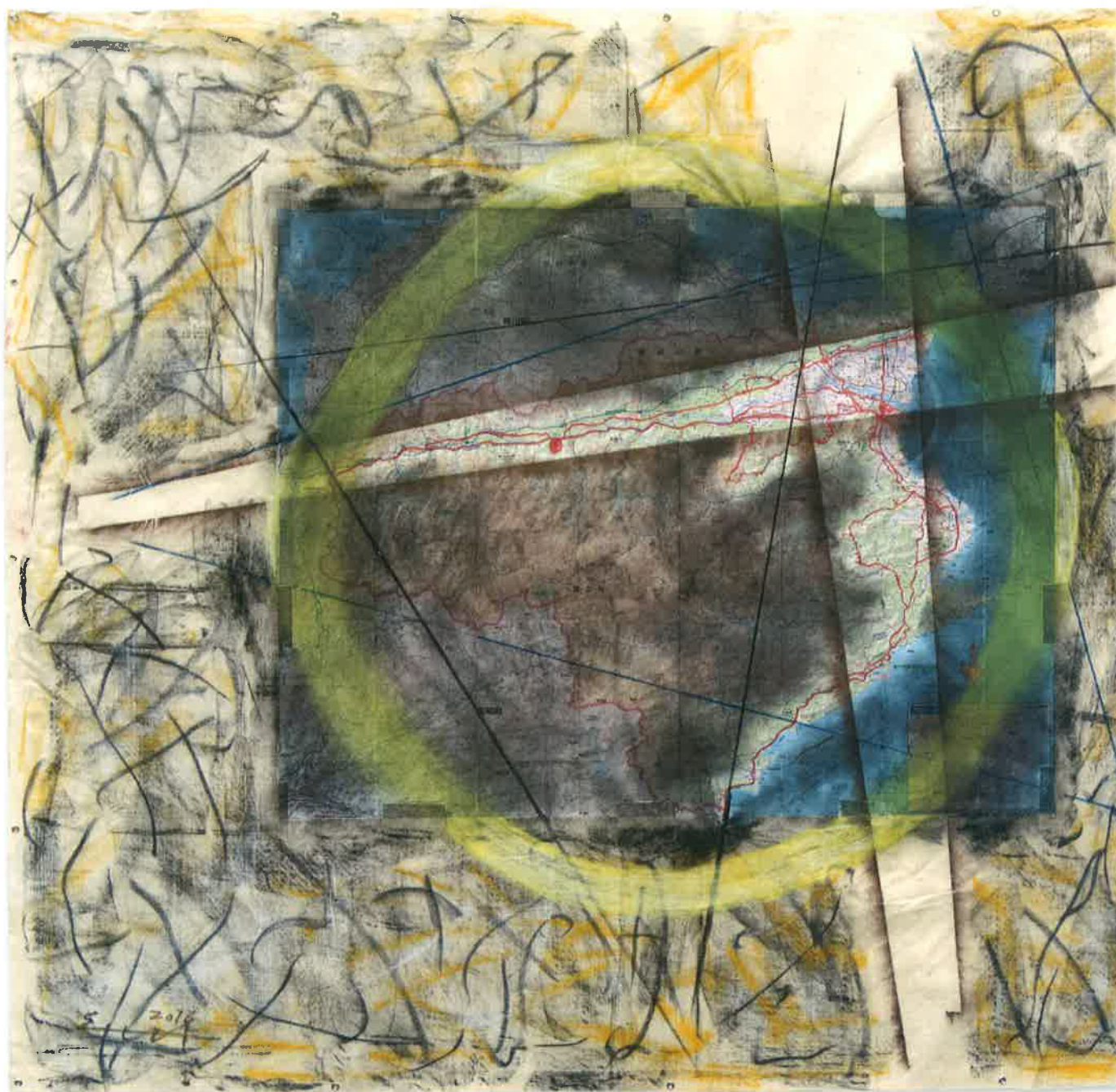
弥蔵があこがれた芭蕉もまた偉大な先人、西行にあこがれました。そして西行は空海にあこがれました。彼ら偉人たちも、その人から見た過去の偉人に憧れて切磋琢磨してきています。はばかりながら私自身も、かねてから松尾芭蕉や木喰上人を思い、旅をして作品化してきています。その思いと同じ人がここにいる、と知り嬉しくなりました。それも阿波の半田という地方の片田舎に。それから徳島、半田をたびたび訪ねて、弥蔵についての調査を始めました。

調べていく中で知ったのは、弥蔵は人一倍

いろいろなことに興味を示したけれども、重要なことは弥蔵に限らず江戸時代後半は、江戸の文化が地方の普通の人を刺激した社会だった、ということです。過去のその時代の社会を知り、その上に立ってその人物像を考え、さらにそこから現在を見る、ということを弥蔵は教えてくれます。まるで弥蔵は教科書のような人です。

2015年、こんな思いを持ち、弥蔵が歩き、その風景を眺めたであろう道を歩き始めました。半田の旧宅跡から徳島へ、徳島から淡路街道へ、また撫養街道を西に脇町から半田へむかう道です。

それを終えた2016年、阿波五街道を歩く旅を始めました。讃岐街道、土佐街道、伊予街道を、徳島城の鷲の門を基点にしなが



それぞれの県境まで向かう旅です。蛇足ですが、進行中の四国遍路旅は現在(2016年5月)、高知市の札所を巡っています。

遍路旅からはじまり、芭蕉をめざした男、弥蔵を知り、江戸の文化、阿波の文化、経済、統治について思い巡らしながら、阿波五街道の整備のことも知り、またそこを歩きました。このことは私自身の作品にも大きな影響を与えていると思います。

過去を知り、今を生きることは、未来の扉を開ける鍵を見つけことができる。私はそう考えています。

大久保 英治

2016年.5月(美術家)

Special Thanks: Izumi Okubo, Group G,
Akiko Maruoka, oto.



水平と垂直 2016年

パステル、木炭ほかによるドローイング
地図:パネル貼り
107.0×130.0cm 作家蔵

境界をこえる男

大久保英治は、昔も今も、石を立てる、石を積むということをよく行う。そして洋の東西を問わず、石を立て、あるいは石を積むという風習は、境界線、境目となるような場所でよく見られるようだ。大久保はこのような境目、間に敏感な作家である。それは大久保が今回の歩行を香川、高知、愛媛の3県それぞれとの県境まで、と定めたことにも重なる。

今回の企画は歴史と美術がクロスし、美術館、文書館、博物館、図書館がこれまでの境界(ボーダー)をはみ出てクロスするものである。この新たな形のコラボレーションに大久保の参加を得ることができたのは必然的なことだったのかも知れない。

さて、大久保が石を立て、積む時には、その石が望むような向きに立てて、そこに無理なく寄り添う相棒の石を沿わせていこうとする。このやり方は平安時代の造園の手引き書『作庭記』[※]によれば「石の乞(こ)はんに従いて」と言うらしい。ここでは設計図に無理矢理合わせて力任せに矯正することを避ける。

この方法論は大久保が枝を組み合わせる時やコラージュを貼り込む時にも通じる。大きな構想や計画、想定する形などがあるとしても、そこに当てはめるように素材をねじ伏せることはしない。作品をつくるというよりも、作品が自ずと出来上がってくるように促すのである。

かつてダーウィンは、何の意図も待たないミズノの行動(排泄行為)や、地盤沈下とサンゴの形成速度の偶然の一致が、やがて大きな地質学的変動を生み出すことを観察し考察した。このように周囲の環境が提供するもの、周りに潜む意味のことをアフォーダンスという。それになぞらえれば、石組みの「石の乞はんに従いて」という方法論もアフォーダンスの作用に従うものといえるだろう。

では、「歩くこと」についてのアフォーダンスとは何だろうか。それは地面である。地面がそこにただ存在することが、歩くことを可能にする。では歩くことがなぜ美術となるのか。

ランドアーティストとしてキャリアを積んできた大久保は、本物のように見せる「見せかけのイメージ」や、芸術作品を気取る「オリジナリティのある創作」、という「まやかし」や「わざとらしさ」から遠いところに立ってきた。その代わりに、すでにそこにある自然とパートナーを組んできた。それは人間の営為の卑小さを日々突きつけられることであり、美術とそれを成立させている文化や社会、歴史への探求を迫ら

れることでもある。その時「造形的に優れているかどうか」という尺度は、もはや大きな意味をなさなくなる。

このようなプロセスを踏んできた大久保の近年の歩行が、大規模プロジェクトから日常の継続的な歩行へと移行してきたことは、人為的な要素、作為的な操作の排除がさらに一歩進んだことを意味する。かくして大久保の制作は、「つくる」ことから「つくらない」ことへと移行する。作為を排して、意思が残る。その境地に、観念的、思弁的ではなく、「ただ歩く」という行為によって大久保はアプローチする。そこにある何でもない道をただ歩くこと。それはいわば、「歩くこと」のミニマル化、ミニマリズムである。このように何の意図もなくただひたすら歩くことがアフォーダンスとして働くとき、美術を成立させる意味が生まれる。

大久保が引きずる木片は、ただ傷つき、すり減る。減り具合はその断面を見ると分かるが、私たちはそこに何を見るべきなのだろうか。私たちが見るべきなのは、すり減った後に「残った」部分ではなく、すり減って「消えた」部分でなくてはならない。いまは消失し、すり減った部分にこそ、この木片の存在はある。その消えた部分の存在は木片をひきずる抵抗感や振動の記憶とともに、ヒモを持つ手が覚えている。歩く行為で生まれる作品は、この消失部分にこそある。

今回の作品制作終了後の某日、大久保氏とともに、荒々しい石組みで知られる徳島市国府町の阿波国分寺庭園を訪ねた。春と秋のお彼岸の夕刻にこの庭園の東端に立ち西を望むと、本堂の窓ごしに立つ立石に夕陽がまっすぐ当たり、空が赤く染まる、という。西方浄土である。そこで西方行(さいほうこう)のことを思い、西方行の名には、西行の名が隠されていることにも気づく。そしてみすばらしくすり減った木片たちのことを思う。これは美術なのか。いや、これはもはや仏像なのではないか。「木喰仏」ならぬ、この「大久保仏」は、歩きながら引きずられ、美術の枠組、境界をこえて誕生する。

作家生活40年を超える大久保は、驚くことにいまだに現在進行中であるが、この木片には、この作家のいま現在における最良のエッセンスが、最も理想的な形であらわれている。

友井伸一

(徳島県立近代美術館 上席学芸員)

※林屋辰三郎校注『作庭記』『古代中世芸術論』日本思想大系23 1973年 岩波書店

水平と垂直 1 2016年

木炭によるドローイング、地図(2万5千分の1):
布貼り、石によるケルン
335.0×372.0cm 作家蔵



出品作品資料一覧

【酒井弥蔵のコーナー】

酒井弥蔵72歳の肖像写真 明治12年(1879)撮影

「御影参り諸事控帳」 慶応4年(1868)

「年々種蒔植物覚帳」 嘉永5年(1853)

「座本蛭子家忠太夫」 明治12年(1879)

「天照皇太神宮豊受皇太神宮御影参」 文政13年(1830)

「おかげ参り心得」 文政13年(1830)

大久保英治〈芭蕉を目指した男1 撫養～半田～徳島～大道 撫養街道、伊予街道、淡路街道 歩行124km〉 2015年

【笈の小文のコーナー】

「笈の小文」 宝永6年(1709)

「出向ふ雲の花の旅」 嘉永2年(1849)

「雲雀集」 天保14年(1843)

「蕉風俳士見立鏡」 嘉永5年(1852)

大久保英治〈笈の小文-大久保英治・大和路百里歩行-〉 2009～16年

【阿波の街道、遍路道のコーナー】

笈 享保13年(1728)

道標(複製) 原品:文化7年(1810)

丁石 江戸時代

大久保英治〈南帰行 大坂峠～徳島～穴喰 土佐街道 歩行140km〉 2016年

大久保英治〈西方行 徳島～半田～境目 撫養街道、伊予街道 歩行96km〉 2016年

大久保英治〈水平と垂直 1〉 2016年

大久保英治〈水平と垂直 2〉 2016年

【徳島の道のコーナー】

阿波国絵図 明和7年(1770) 森文庫(レブリカ)

「阿波名所図会」 探古室墨海/著 文化11年(1814) 森文庫ほか P.12参照。

大久保英治〈徳島の道〉 2014～15年

執筆者(文末にイニシャルで表記)

徳島県立博物館 長谷川賢二(HK)

徳島県立博物館 松永友和(MT)

徳島県立近代美術館 友井伸一(TS)

徳島県立文書館 徳野隆(TT)

徳島県立図書館 田村加代(TK)

徳島県立図書館 中原美弥(NM)

連携展示「阿波の道を歩く 芭蕉をめざした男・酒井弥蔵×現代アーティスト・大久保英治」展 解説冊子

2016年7月20日発行

編集 徳島県立近代美術館、徳島県立文書館、徳島県立博物館

発行 「徳島県の文化の創造的再発見事業」実行委員会

印刷・製本 原田印刷出版株式会社

デザイン 有限会社クリップ

